

清末小説から 109

2013.4.1

- いくたびかの阿英目録 1 樽本照雄 1
Richard Marsh の中国語訳..... 渡辺浩司 10
张葆常的少年中国和废汉语论 傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(五) 姚 达兑 24
《筆生花》初刊本小識 鄭 振偉 30
清末小説から 33

おしらせ。『清末民初小説目録』第5版を編集集中です。ウェブ上で公開できるよう検討中

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録 1

樽 本 照 雄

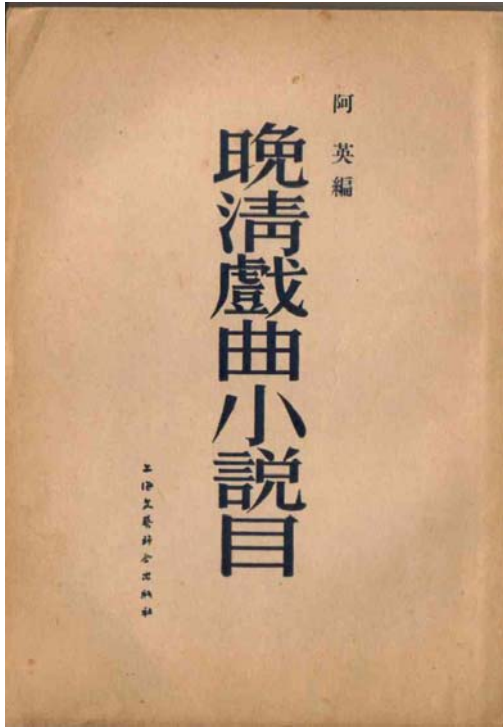
阿英「晚清小説目」*1(1954、以下阿英目録と称する)を見ていてきづくことが2、3ある。阿英目録を中心において、そこから自然に派生する問題のいくつかだ。

清末小説を収録する先行目録は、なにか。よく知られた翻訳目録がある。最初、阿英は有用だと賞賛した。だが、のちに

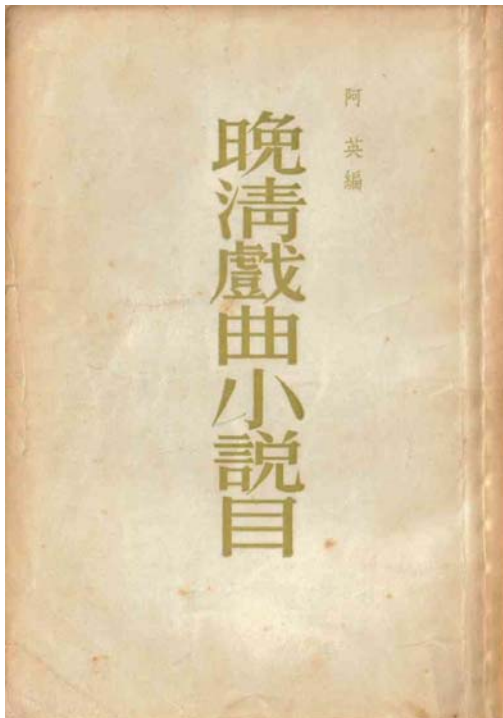
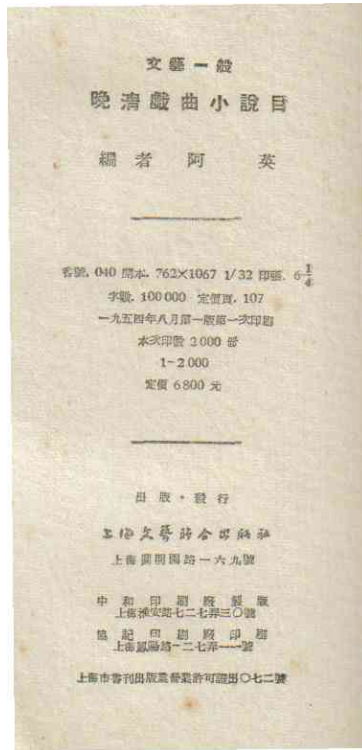
それを抹殺したのはなぜか。『二十年目睹之怪現狀』の刊行年月をめぐって日本と中国の研究者間で応酬があった。阿英目録が原因である。廣作ホームズの著者はどうなっているか。林訳『英国詩人吟辺燕語』の著者に関して奇妙な記述がなされている。ここをたどると、林紓批判の裏に隠されたある事実に着着する。従来常識をこえた奇怪で醜悪なものだ。驚いたことに、吳趸人の作品にも、ある誤解が広まっている。存在していないはずの単行本が、刊行されたという、など。

誤記をするという落ち度が、阿英にあったのか。誤解をさそう阿英の記述なのか。あるいは、責任を負うべきは、誤解をしたのちの研究者のほうか。ある時期から誤りが定着したのはなぜか。

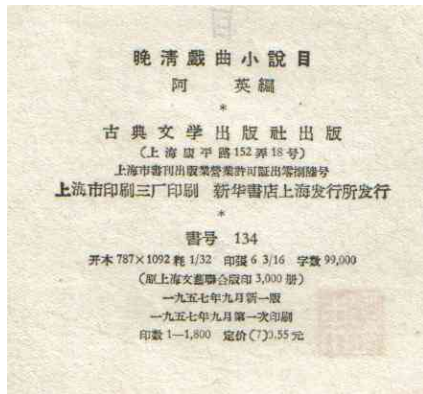
話題があちこちにとびそうだ。しかし



初版



増補版と中華書局版は同一



阿英目録を根底に置いて、みなつながっている。過去の文献を紹介しながら、そういうのはなしをつづけたい。

阿英目録について簡単な紹介をしておくことから始めよう。阿英によって作成され、研究界に屹立するこの空前の目録だ(絶後とはいわない)。その構成と成り立ちを視野にいれなければ、ここであつかう間違いがどのように発生したのかが、わからなくなってしまうからだ。

阿英目録の特色

阿英(銭杏邨、1900-77)の業績を、清末小説研究にしぼる。

主となる刊行物をたどれば、『晚清小説史』(1937)が、ひとつの節目になっている。そのころ彼が発表していた関係論文をまとめて成った。その延長線上に本稿であつかう阿英目録(1954)が出てくる。さらに、1957年から1960年にかけて出版された5種の叢書「中国近代反侵略文学集」がある。そのなかの2種類は、以前に北新書局(1948)から「近百年来国難文学大系」と称して刊行されていた。これらが、1960-62年の「晚清文学叢鈔」という大規模作品集の刊行につながっていく。

その後、中国では「文化大革命」によって研究界も他の分野と同様な壊滅状態におちいった。阿英の仕事は、中断したままに放置されたという意味だ。10年間という長い空白の時間を経て、研究態勢が立ち直ったと実感できたのは、1980年代になってからだ。研究論文の発表が増加してくる。1990年代からは、文学辞典

類が多数刊行される状況が出現した。それらのことから、私は中国の研究界が新しい段階に入ったと理解した。

今から振り返れば、ほとんど研究の出発点であった阿英目録だ。編集方針は、該書の凡例に示されている。その特色もそこから同時に知ることができる。

次は、「晚清小説目録例」を私なりにまとめたその大意である。

- 1 ほかの小説目録と比較しても阿英自身のほうが多数の清末小説を所蔵している。
- 2 創作と翻訳に分け、単行本を主として雑誌にも及ぶ。その数は千余種。その期間は光緒初年から辛亥革命成功まで。
- 3 主要な各作品については『晚清小説史』で詳しく論じた*2。そこで、簡素な目録にすることにした。
- 4 本書は、原本を収集して成っている。編集校正の仕事には、息子銭毅(1947年戦死)があたった。

この凡例は、なんども見ている。しかし、あらためて読んで私がきづくのは、阿英が触れていない事項があることだ。

ひとつは、記述するときを使用した記号についての説明がない。

今まであまり留意していなかった。見れば理解できると思ったからだ。だが、探しても記述がない、というのは気になる。阿英自身は、そのころの研究界に習慣としてあった記述規則を、ただ使用しただけだろう*3。だが、明確な指示がな

いから、のちの利用者には理解できなくなってしまうのではないか。複雑ではないにしても、だ。長い研究の空白時間があったことが、そういう些細な部分にも影響を及ぼす。ある誤解が発生したことにも関連する(後述)。

さて、阿英が凡例において最初に強調するのは、彼が所蔵する清末小説の多さについてだ。「千余種」という具体的な数字をあげて話題にしている。研究者の幾人かが清末小説の作品数をかぞえはじめた。阿英に引きずられると必然的にそうなる。私もそのなかのひとりにすぎない。

ほかとの比較をするため、阿英目録に収録された小説数を示しておく。目録にもとからある細かな誤り*4はそのままにして、項目だけを単純に合計する。

増補を含んで創作は479件、翻訳は628件の全1,107件だ。彼のいう「千余種」に近い。

収録期間は、1872年から1911年まで、範囲外の作品も若干あるが目をつむる。清末時期においてそれくらい多数の小説が、発表あるいは刊行された。阿英目録によって算出すれば、翻訳は全体の56.7%を占める。そこからあの有名な「翻訳は創作よりも多い」という彼の主張が導き出される。

これまた多数の研究者が、阿英の指摘を引用しつづけた。清末小説の特色のひとつは、創作をこえる翻訳の多さなのである。全体の3分の2を占める、と。

阿英に影響を受け作品数を数える研究者は、その数字に目が釘付けになる。た

だ、本当にそうなのか、という疑問を持つ人がいたかどうかは知らない。

阿英が主張したことは、間違っていない。ただし、ある条件が必要だ。阿英目録によれば、という前提をぬきにしては語ることができない。ここにご注意ください。あくまでも阿英目録の範囲内で算出すれば、翻訳は創作よりも多い。

しかし、阿英目録から離脱すると話は異なる。

阿英よりもさらに広く材料を収集してあらたに目録をつくる。その結果は、阿英がいう通りにはかならずしもならなかった。新しい目録で数えてみれば、阿英の主張を確認することはできない。創作が翻訳よりも多いのである。このことは、以前に述べたし、中国で話題になったこともある。あらためて説明してもいいが、同じことのくりかえしになる。いまは省略する。

阿英目録の編集方針にもどる。

先行目録など

「ほかの小説目録」が、具体的にはなにを指すのか。

凡例では、孫楷第の名前をだすだけ。詳しい状況を知るためには、彼の『晚清小説史』を見るのが普通だ。いくつかの書目名があげられている。

たとえば、『涵芬楼新書分類目録[総目]』がある。

商務印書館編訳所が設置した企業内図書室の蔵書目録だ。阿英が見て、それが当時最も多くの小説群を収録していた。文学部(類)小説の翻訳は400種近く、創

作は約120種だと説明する。あわせて約520種だ。私は『涵芬楼新書分類総目』(増補版)にもとづいて次のように算出した。1911年以前の刊行に限定すれば、翻訳は398件、創作は155件で合計553件になる*5。

また、雑誌『小説林』第9期に掲載された調査表がある。東海覚我(徐念慈)編「丁未年小説界発行書目調査表」(1908)*6だ。丁未年は1907年を指し、120余種を収録する(私が数えると123件)。

ついでに書いておく。阿英を含めた研究者が言及しない「小説林書目」(『小説林』第9期戊申年(1908)正月)がある。該誌の巻末に見えるのだが、影印本には収録されていない。誰も触れない理由だろう。こちらは、86件を数える。

名前のあがった顧燮光『訳書経眼録』(1934)*7には37件があり、阿英が書く「30種にすぎない」とほぼ重なる。

阿英がそこで最後に言及するのが、孫楷第『中国通俗小説書目』(1933)*8だ。『訳書経眼録』と同じくらいの収録数だという。ならば30件前後か。阿英目録の説明では「わずかに40余目」になっている。しかし、私が孫楷第目録から採録した小説は、172件にのぼった。よった版本の発行年が同じではない、重版を入れる、など数え方が異なるのが原因だろう。

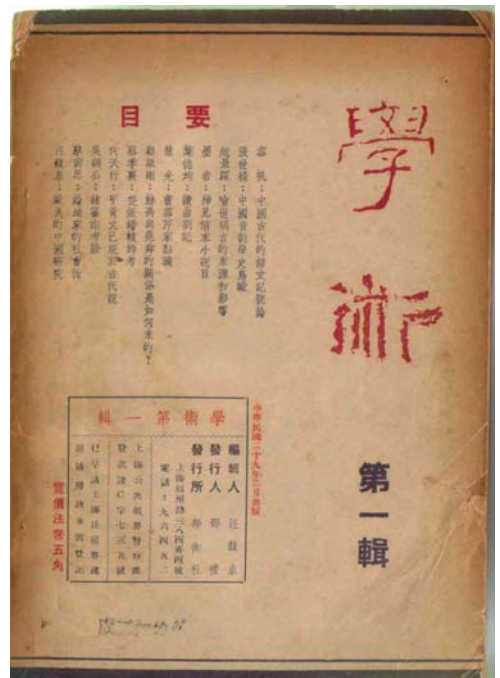
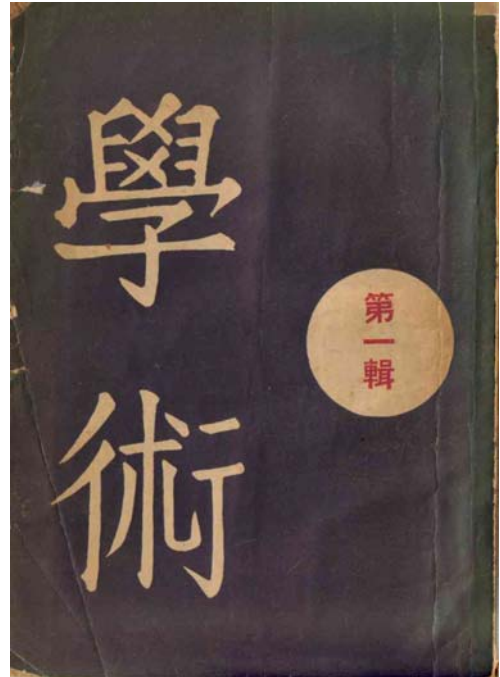
ほかに、阿英に先行する目録がまったくなかった、というわけでもない。彼が名前をあげなかった目録にも触れる。

商務印書館関係では、出版広告が『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)に掲載されている。収録件数が比較的多い。

主として翻訳小説を広告して全248件、それには創作の22件を含む。ほかにも広告はあるが省略する。

墨者「稀見清末小説目」(『学術』第1輯1940.2)には、37件が収録されている。

表紙と裏表紙



織成作品美歐評編

種，再次英國五十六種，其餘零零星星的更不成一個數目；一共總計祇有

到會實乏到下面表裏所早露出來的這種地步。



中國繙譯歐美作品的成績

虛白

曾虛白編

日編譯漢學文圖錄

俄國文學漢譯編目

趙景深

例言：

(共計八十九種)

- 一、本目錄以單行本爲限，雜誌報章上的譯文，概未列入。
- 二、本目錄截至一九二八年九月止。
- 三、合譯者在二人以上的僅舉其一。
- 四、所舉書較爲人所共曉之書局所出版的書，在文藝市場不大通行，或已絕版者，列入者極少。
- 五、作者次序略以生年早遲依次排列；作品略依出版先後排列。
- 六、書局預告而未出版之書，概不列入。

趙景深編

以上を見ればわかる。阿英目錄の収録数1,107件は、数量からいって、ほかを圧倒している。阿英が最多だと認める涵芬樓の新書総目とくらべても、その約2倍にふくれあがっている。

見逃せない翻訳文学目録がある。阿英は、彼の『晚清小説史』、阿英目録において言及していない。故意に隠した。まるで隠せばその存在を抹殺できる、と考えているかのように。

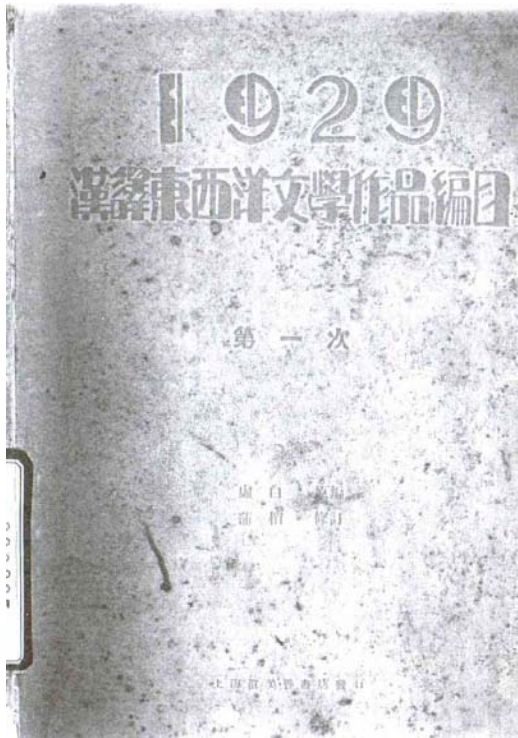
阿英が隠した翻訳文学目録

その目録は、雑誌の掲載が初出だ。(曾)虚白原編「中国繙訳歐美作品的成績」(『真美善』第2巻第6号1928.10.16)という。

題名が示すとおり、欧米の作品を対象にし、単行本を中心にして収録する。雑誌からの採取はない。国別にまとめ、作者、原作名を英語で表記する。原作の漢訳名と訳者を漢字で表わし、残念ながら刊行年月と出版社名は不記だ。数の多いほうでは、フランスが68種、イギリスが56種、その他を合計して198種の収録になる。

最初に声明していわく、この目録には八ガード、コナン・ドイル、ルブランなど3、4流の作家は意識的に排除してある、遺漏ではない、と。鄭振鐸が林訳を罵ってそういった。同じことばを使用するから同じ意識をもって編集されたのだ。

ロシア文学は別に掲げる。趙景深「俄国文学漢訳編目」(同誌同号)だ。著者別(漢字と英語表記、生卒年を示す)で89種を収録する。出版社は略号を使用し、原作



表紙



扉

名は英語表記となっている。こちらにも刊行年月は記されていない。

というわけで記述の項目は一致していないが、両者をあわせて、17カ国計287種となる。

掲載誌『真美善』は、父曾孟樸と息子の虚白が共同で経営編集してよく知られていた。

上記のふたつに日本の部を増補して成った単行本が、つぎの目録だ。

(曾)虚白原編、蒲梢(徐調孚)修訂『漢訳東西洋文学作品編目(第一回)』(真美善書店1929.9.28。表紙は『1929漢訳東西洋文学作品編目第一次』)

1929年3月31日までに発行された書籍を集めている。西文人名索引、中文人名索引をつけているのは親切だ。

雑誌初出と異なる点を紹介しよう。

書名を「東西洋」に変更する。日本(東洋)の部を増補したことによる。

該本の著者表示を見れば、日本の部は、蒲梢(徐調孚)*9が編集したとわかる。増補したばかりではない。全体の記述項目を統一した。

国別に分け、さらに著者でまとめる。そのとき日本人作家には生卒年を、西洋人には、漢訳名、英語表記、わかるものは生卒年を表記する。

原作品の英語表記も、判明しているものには示してある。珍しい。出版社も略号でわかるようになっている。残念ながら、こちらにも刊行年月は省略だ。

新しく「雑集」という項目を設けた。作品集をさす。

書名に「第一回」と明記している。毎

年1回刊行する予定でつぎに第2回を準備していたのだろう。しかし、それは実現しなかった。初版に1,500部を印刷したが、数年しても完売しなかったのが原因だ。そう説明するのは、修訂を担当した徐調孚である。

売れなかったとしても研究者の注目を集めたい。

1950年代になって張静廬が自分の編集する出版史料にそのままを収録した。

蒲梢「漢訳東西洋文学作品編目 一九二九年三月止」(張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版)と表示される。

原本にある副題あつかいの「第一回」が書き換えられた。おまけに、なぜかしら曾虚白の名前が消失している。また、索引は採用していない。作り直す手間を省いたか。徐調孚が当時の様子を回顧して短い説明文をつけた。さらに、戚煥垣が附録として4頁とすこしの増補をしている。

阿英目録の刊行が1954年8月だ。張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』は、1954年12月に出版された。微妙な時間のズレがある。見た目には先行する阿英目録が、曾虚白目録に言及しないのは当然だ。そう考える人もいるかもしれない。

ところが、それは違う。資料収集の達人である阿英が、1929年刊行の曾虚白目録を知らないはずがない。

私の指摘には、根拠がある。

『中国新文学大系』第10集史料索引(上海良友圖書印刷公司1936.2.15/影印本による)に書かれた阿英「序例」だ。小説

目録8種を列挙して2番目に曾虚白目録を掲げているから見てほしい。

漢訳東西洋[文学]作品編目(虚白, 蒲梢, 一九二九)5頁

書名に「文学」が抜けているが、曾虚白と徐調孚の編著に間違いはない。

そればかりか、翻訳部分についてわざわざ曾虚白目録に言及している。ここは重要だ。

「翻訳部分は、虚白蒲梢の編集本がとも役立った。この目録がなければ、翻訳部分はこのような成果をあげることができなかったと考える」(6頁)

これはもうほとんど絶賛といってよい。阿英は、そう自分で賛美したにもかかわらず、1950年代に出た阿英目録では、なぜ無視するのか。どうして曾虚白に言及しないのか。張静廬も曾虚白の名前だけをわざと排除している。

阿英の業績を長く見てきて、研究上の大きな助けを私ที่ได้てきたのは事実だ。しかし、疑問に感じることもある。

たとえば、阿英は、その時の政治的基準によって、あるいはなんらかの理由で、文献資料に細工をほどこすことがある。はなはだしくは作品本文に手を加えて、ある部分を削除したりするのだ。清末小説の『鄰女語』『文明小史』などのことを指している*10。

資料は資料として厳然と存在しているではないか。無視しようが、あるものはある。この理屈は、中国の学界では通用しない。その資料名を隠せば、あたかも

もとからなかったかのように、と思
うらしい。

阿英と張静廬が行なった曾虚白の名前
はずしは、虚白が台湾に渡ったことが理
由のひとつなのだろう。1950年代はそう
いう時代だった。

では、現在は違うのか。 罍

【注】

- 1) 阿英『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社
1954.8 / 増補版 上海・古典文学出版社1957.9新
一版、北京・中華書局1959.5。増補版を使用する
- 2) つぎの索引を作成した。樽本編『阿英『晚清小
説史』ほか索引』日本・清末小説研究会2007。
2.1 清末小説研究資料叢書10。内容は、阿英
『晚清小説史』、歐陽健『晚清小説史』、韓南
『中国近代小説の興起』、樽本照雄『清末小説研
究集稿』の索引。
- 3) 詳細な新式標点符号の例が収録されている。胡
適等「請頒行新式標点符号議案(修正案)」阿英
『中国新文学大系』第10集史料索引、上海良友圖
書印刷公司1936.2.15 / 影印本による、231-240頁
- 4) 細かな誤りとは、誤植、脱字、創作と翻訳の取
り違えなどをいう。いくつかの中から、訳者につ
いて間違えている箇所を紹介する。次の作品は、
著訳者がズレたか入れ替わって表示される(増補
部分175頁。傍線、掲載誌刊年は省略)。
血刀縁
誤 (英) 弥士畢著 李英圃、王星如訳
正 (英) 女士亞利美都原著 夏栄光子謙、黄
恩煦玉垣訳
奇 縁
誤 李子鳴、郭若衡訳
正 (英) 弥士畢著 王星如訳 李英圃潤
奇 藍珠
誤 (英) 屈登著 李英圃、王星如訳
正 (英) 屈敦著 李子鳴、郭若衡訳
- 5) 沢本郁馬「商務印書館『涵芬樓新書分類総目』
について」『清末小説』第35終刊号2012.12.1
- 6) 東海覚我(徐念慈)編「丁未年小説界発行書目

調査表」『小説林』第9期 戊申年正月(1908)
 / 汪家燊輯注『中国出版史料・近代部分』補巻下
冊 武漢・湖北教育出版社2011.2

- 7) 顧燮光『訳書経眼録』杭州・金佳石好楼1934
(王韜、顧燮光等編『近代訳書目』北京図書館出
版社2003.10影印本) / 「小説経眼録」阿英編
『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』北京・中華書
局1960.3上海第1次印刷 / 台湾・文豊出版公司
(1989.4) 影印本 / 韓学会点校標注「訳書経眼
録」汪家燊輯注『中国出版史料・近代部分』補巻
下冊 武漢・湖北教育出版社2011.2
- 8) 孫楷第『中国通俗小説書目』北平・国立北平圖
書館1933.3初版 / 北京作家出版社1957.1北京第一
版 / 1958.1北京第二次印刷 / 台湾・鳳凰出版社影
印1974.10 / 北京人民文学出版社1982.12訂正重版
- 9) 徐調孚については、阿英『中国新文学大系』第
10集史料索引、218頁に簡単な紹介がある。児童
文学訳者。浙江乍浦人。文学研究会幹部(訳述
略)。また、橋川時雄『中国文化界人物総鑑』
(北京・中華法令編印館1940.10.25初版 / 名著普
及会復刻1982.3.20、353頁)にも項目がある。
1898-x 浙江省の人。文学研究会会員、かつて
「文学週報」編輯、「小説月報」編輯に任じ、特
に童話作家として知られる(訳書略)。
- 10) 阿英「叙引」のついた『文明小史』60回(北
京・通俗文藝出版社1955.7)だ。本文第59回に削
除がある。ここには「老残遊記」原稿第11回から
盗用した箇所があるからだ。しかし、阿英は削除
したとは書くが、その理由を説明しない。
樽本「版本のこと 『鄰女語』を例として」
『咄咄』第9号1977.11.30、31-36頁。要約：阿
英が「鄰女語」を復刻した時、義和団の暴力につ
いてはその部分を削除していることを指摘する。
後世いくら政治的な評価が変化したとはいえ、そ
の種の行為は文学研究にとって悪影響をおよぼす
ことをいう。

本誌第110号は7月1日公開予定です

Richard Marsh の中国語訳

渡辺浩司

1

Richard Marsh は、本名 Richard Bernard Heldmann、1857年生、1915年没、英国の作家・ジャーナリストである。彼の短篇2作の翻訳について、これまで不明だった掲載誌等が判明したので、本稿で報告する。

2. 《催眠術》の原作

《小説月報》第四卷第十二号(商務印書館, 1914年3月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》を使用, 発行年月日は『清末民初小説目録 第4版』(樽本照雄編, 2011年3月31日)による)に、《催眠術》(鐵樵訳)なる短篇作品が掲載された。書名下には“譯海濱雜誌”とあり、Strand 誌から訳されたことはわかっていたが、原作者も原作も不明だった。この度、判明した原作は『The Affair of the Montagu Diamonds』(原作者 Richard Marsh)、掲載誌の詳細は『The Strand Magazine』Vol.45-No.266(George Newnes, 1913年2月)。

訳者“鐵樵”は、同誌編集責任者でもあった惲樹珏で、原籍は江蘇常州、1878年生、1935年没。

2-1

原作は、ろう学校の教師である主人公 Judith Lee が、自らのすぐれた読唇術によって、警察に協力し難事件を解決するシリーズの一作である。拙稿「《蔓陀羅克》の原作」で取り上げた『Mandragora』も同シリーズの一作である。主人公の一人称で語られる原作のあらすじを紹介する。

3月の寒い日の午後、私(Judith Lee)が Embankment Gardens を通った時、男が女に声をかけ、女が走って逃げ去るのが見えた。男は追わずに笑い「お前はまだ十分に訓練を受けていない」等と唇を動かした。男は30歳以下、形容し難い容貌で、全く好きになれない何かがあった。川沿いの堤に息を切らした先ほどの女性があり、私は声をかけた。彼女は「男に脅迫されている；その男のせいで失業した；今も職が無く、空腹で耐えられない」等と話した。

私は彼女を支えてレストランに行き、改めて話を聞いた。彼女は「名は Maggie Harris；ある自営業者の所で住み込みの家庭教師として働いていた；家や店から品物が紛失し始め、なぜか疑われた；6週間前、品物が紛失し、不在中に雇い主が自分の部屋を捜した；店には Turner という手伝いがあり、その捜索は彼の提案だと思うが、品物が部屋から見つかった；雇い主はすぐに自分を追い出し、それ以来、失業中である；父は亡

くなり、義母と暮らしていたが、ある男性のことで義母と仲違いし、家を出た；友人はおらず、就職の見通しも無い」等と話した。私は彼女を自宅(Sloane Gardensのフラット)へ連れ帰った。

15,6日後の朝、Maggie と仕事をしていると、真下に住む Marshall 女士が駆け込んできて、「泥棒に遭い、真珠の首飾りを盗られた」等と言った。私が置き忘れかも等と話す、女士は「ピスケットの箱の底に隠していたのに、朝、ピスケットがテーブルの上であり、箱は空になっていた；昨晚、物音が聞こえて、少しの間、目を覚ました」等と言った。Maggie を残して、女士と部屋に行くと、本当だったので、すぐに門番の Wheeler を呼び、警察に連絡した。門番は、女士の帰宅後は誰も怪しい者は入らなかったと言い、警官らは、賊は女士のフラットへ鍵を開けて侵入したと言い、結局どうやって盗んだのかは謎だった。

部屋へ戻ると、Maggie は書きものをしていた。私にはそのつもりは無かったが、彼女が求めたので自分の仕事を手伝ってもらっていた。知れば知るほど、私は彼女のことを気に入っていた。彼女は「私が行く所、どこにでも泥棒がついて来る、私を閉じ込めるか、追い出すかしてちょうだい」等と言った。顔は真っ青で、神経が過敏になっていた。私が尋ねると、彼女は自らの盗みは否定した。私は「先ほどの言葉を貴女がなぜ口にしたのか理解できない」等と言い、彼女が話す前にその話を打ち切った。

盗難事件は未解決で、10日後、門番の

Wheeler がエレベーターの所で「自分は独立して仕事をしたいので、家の面倒を見てくれる妻が欲しい、それで Maggie 女士のことを考えている」等と話しかけてきた。彼女に伝えたのかと尋ねると、彼は「彼女に対してよからぬことを企む男があり、そのせいで彼女は私の話は聞いていない」等と答えた。初耳だったので、更に尋ねると、彼は「彼女には知り合いが2人いる；ある午後、彼女が駆け戻り、男を入らせないよう言った、直後に、金髪で細身の卑しい男が現れた；男に彼女のことを聞かれたが、何も答えず追い返した*1；その3,4日後、彼女が出かける時、声をかけたが反応が無かった、表情に異変があったので、後を追った；Pimlico Roadの角で、彼女はコートも帽子も黒ずくめの背の高いやせた男と会い、車に乗り走り去った；6時頃、帰宅時には病気のように青ざめていた、声をかけると、独り言のように『すべて悪い、生まれてこなければよかった』等と言った；以後も、彼女はその男に2回は会っており、帰宅時は同じ状態だった；自分は彼女を助けたい、彼女なら自分の求める妻にふさわしく、自分もよき夫になれると思っている；よければ、貴女からも彼女に話してほしい」等と言った。私は両者とも気に入っていた、ただ彼女は衰弱していくようで、いつも何かに聞き耳を立てている感じだった。ある日、彼女は私の問いに「自覚はあり、真夜中でも何かを窺っている気になるが、何かはわからない」等と答えた。そこで「貴女は夫が欲しいのでは？ Wheeler は何か言わ

なかった？」等と話を向けると、彼女は顔を覆い、やがて立ち上がり「そんなことを話すなら、私を殺してちょうだい」等と言い、部屋を出て行った。私は理解できず、彼女は二重人格なのでは等と考えた。

翌朝、通りを歩いていると、前に見た金髪の男を見かけた。私は男を尾行し、通りの端のレストランに男に続いて入った。男は先客のいたテーブルに座り、私も2人の顔がよく見えるテーブルに座った。先客は黒っぽい服装で、その目はこれまでに会った人の中で一番不快なものだった。この男が、門番の話していた Maggie と共に車に乗った男だと思った。彼らは小声だったが、口の動きははっきり見えた。金髪男：「金曜の午後、Montagu がダイヤモンドとお金を家に持ち帰り、壁の金庫にしまう；彼は夫婦そろって週末に Brighton へ出かける；そこで、Argus 教授、土曜に貴方に働いてほしい」黒っぽい男：「彼女は私の思い通りだ；真珠の首飾りも、何もばれずに手に入った」金髪男：「今回は、彼女を家に侵入させ、精巧な道具でわかりにくい場所の金庫を開けさせねばならない；もし彼女がミスして捕まり、我々の道具を失ったら、大変まずい」黒っぽい男：「金庫の場所と開け方がわかっていて、彼女が命令通りに複製の金庫を開けてみせた；土曜はうまくいく」金髪男は黒っぽい男を称えて、「彼女が Judith Lee 女士宅にいるのがわかって、運がよかった」等と言った。彼らが店を出た後、私はどうすべきか考え、外科医でもあり、精神

病理学の権威でもある Rideman 博士の所に行った。途中、Ellis 刑事に連絡し、博士の家で会おうと伝えた。私は2人を互いに紹介した後、Maggie のこと 出会いから、家での様子、Marshall 女士の首飾り盗難、そして先ほどの2人の男の会話のことを話した。更に「義母と仲違いした原因の男は、Argus 教授だと思う、男は以前から彼女に催眠術をかけ続けて、抵抗力を奪い、自らの支配下に置いた」等と言った。刑事が疑問を呈すると、博士は「そういうことは確かに可能だろう」等と言った。私は「Montagu 氏は実際に宝石商で、この建物の1階に夫婦で住み、宝石を持ち帰って家の隠し場所にしまうのが安全だと言っていた」等と話した。刑事がまた疑問を呈したので、私は「Montagu 夫妻は週末に出かける習慣があり、もし彼女が行動すれば、我々で見届ければいい、その後、彼女が盗品を運んだ時に、彼らを捕まえればいい」等と話し、博士も同意した。我々3人に門番の Wheeler も加わった。

金曜の午後、Montagu 夫妻は出かけ、使用人は休みをもらっていた。土曜、彼女の神経が非常に過敏になり、落ち着かなくなっていくのに気付いた。夜10時すぎ、彼女が寝室に入ったので、博士たちに連絡し、博士と刑事と合流した。1時に、門番が現れた。2時すぎ、我々は居間におり、ドアを開け、明かりが廊下を照らしていた。博士は「催眠状態ならば明かりは気にしない」等と話した。やがて彼女の部屋から音がし、平服姿で廊下を通り、表へのドアを開けた。博士が

「十分な催眠状態ならば見られても大丈夫」等と言い、全員で彼女の後をついていった。途中で刑事が「彼女は気付いていないのだろうか？」等と言うと、博士は「すぐにわかる」と答えた。その時、彼女が立ち止まり、耳を澄ます仕草をした。刑事が「聞こえた？」等と言うと、博士は否定し「遠くの誰かからの指示を聞いている、これは最も興味深い案件だ」等と話した。彼女は階段を下り、Montagu 宅の前で鍵を取り出し、ドアを開けた。鍵について疑問を呈する門番に、刑事は「万能鍵だ」等と話した。彼女は暗がりの中に入り、我々も続いた。博士は彼女の催眠状態を確認し、明かりを点けた。彼女はそのまま進み、寝室へと行って行った。前に、病気の夫人を見舞いに寝室に何度も来たことがあったが、金庫を示すものは全く見かけなかった。彼女はここに来たことはないはずなのに、壁掛けの1つを脇に寄せ、ばねに触れ、壁板を開けた。奥に小さな金庫があり、彼女の手は謎めいた動きで鍵を差し込み、謎めいた動きで何かを回し、易々と金庫を開けた。我々が見ている中、彼女は金庫内のかばんから包みや札束を取り出し、かばん、金庫を閉め、壁板をもとに戻した。そして振り返り、我々の方へ進んで来た。目は開き、瞳孔は定まっていた。博士が声をかけたが、彼女は無視して玄関へと進み、外に出た。彼女、そして我々と階段を上り、私のフラットへ戻った。盗品を確認しようと言う刑事に対し、私は見張るだけにしよう言い、彼女の無実を証明し、2人の黒幕を逮捕せねば

ならないと話した。

翌日、彼女は普段通りに起きたが、疲れた感じで、声をかけても何も聞いていないようだった。10時半、彼女は普段の日曜のように聖書とハンドバッグを持ち、出かけた。階段を下ると、博士と門番があり、2人は挨拶したが、彼女は無視して通り過ぎた。外に出ると、通りの角に刑事がいた。感情的になっている門番に、博士が勝手な行動は慎むよう注意した。彼女が通りの角で見えなくなった。刑事は我々を招き寄せ、彼女が「教授」と車に乗ったことを話した。我々も刑事の用意した車に乗り、車中で刑事が「仲間の車が尾行している」と話した。車を止め、降りると、前の車の運転手が「2人が前方の家に入った」と伝えてきた。前にいた4人の警官と合流し、その家に進み、刑事が合い鍵でドアを開けた。中にいた女性が「あなた達は誰？」等と言うと、上から大きな物音が聞こえた。刑事は女性を押しよけ、階段を駆け上り、フラットのドアを開けていった。上っていくと、鍵のかかったドアがあり、刑事は部下の警官に体当たりで開けさせた。我々も部屋に突入した。ちょうど私が入った時、Argus 教授がバルコニーから跳び下りるのが見えた。刑事は警官に下で動かなくなっている犯人を確認するよう言い、部屋にいたもう1人の犯人におとなしくするよう言った。男の身体からは盗品と万能鍵が見つかった。

私がフラットに戻った時、Maggie は居間で泣いていた。その隣に懸命に慰めている門番がいた。

読唇術を使うには、当事者の顔が見えなければならぬ。更に、それに拠り犯罪計画を知るには、犯人たちが公共の場で打ち合わせる必要があり、やはり主人公の身には偶然の上に偶然が重なるのである。

2-2

翻訳について述べる。他に訳されていた場合の原作探しの参考になると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Miss Lee	梨姑(2頁上), 梨小姐(5頁上)
Maggie Harris	麥及 夏麗
Turner	拖那
Wheeler	惠羅
Argus	亞虬
Riderman	拉陀門
Ellis	伊立司

書名について、原作は「The Affair of the Montagu Diamonds」(Montagu ダイヤの事件)と物語全体を表す。しかし、翻訳は“催眠術”とし、犯罪の方法をいきなり明かしている。物語の展開から言って伏せておくべきなので、よくない改訳だと思う。また、原作には書名下に読者向けの前書きがあり、中に“Judith Lee, lip-reader” (Judith Lee, 読唇術師)とある。これで、このシリーズを初めて読む人でも、物語を理解できるようになっている。一方、翻訳は前書きを訳さず、主人公について紹介していない。故に、このシリーズになじみの無い読者は、主人公をど

んなつぶやきも聞き逃さない地獄耳の持ち主だと誤解したのであろう。原作を生かすために、主人公の特長の紹介は必要だと思う。

内容について、犯人逮捕の最後の場面以外は、物語の展開通りに訳しているが、省略が目立つ。その最後の場面を挙げる。

There came a sound from somewhere above, as if a heavy piece of furniture had fallen. Thrusting the woman aside, the inspector ran up the stairs with us at his heels. There were two doors on the first landing, which he threw wide open; then, turning, sprang up three more stairs which were on the left, to a door beyond. He turned the handle then exclaimed:

“The door's locked. He's in here. Pankhurst, drive this door open.”

A great, big man, one of the four who had met us outside, went rushing forward, and by the mere force of his impetus carried the door away as if it were so much matchwood. In another second we were all of us swarming into the room. Then I heard someone shout:

“Look out! He's going to jump through the window.”

Just as I entered the man whom I had heard addressed as Professor Argus jumped, before anyone could stop him. There was an old-fashioned

French window leading on to a little balcony; it was open when I got into the room. I saw a tall figure pass through it, then vanish. One of the inspector's men, running on to the balcony, looked over the low railing.

“ He must have struck the spikes of the railings and fallen on the wrong side to the bottom of the area. He's lying all of a heap. ”

Inspector Ellis's voice, as he replied to this information, was cold and official.

“ Two of you men go down and look after him. ” He turned to someone else who was in the room. “ You are my prisoner; if you are a wise man you won't make any fuss. ”

The man addressed did not look as though he were likely to make what the inspector called a fuss it was Turner, from whom Maggie Harris had fled in the Embankment Gardens, and whom I had seen concocting his hideous plot in the restaurant. His confederate was dead, the arch-criminal. Whether his intention was to commit suicide, or merely to make a wild effort to escape from the police, was not clear. In his pockets were that whitey-brown paper parcel which we had seen Maggie Harris take out of Mr. Montagu's safe, and which contained a large number of uncut diamonds; the canvas bag, in which

there were nearly a hundred pounds in gold, besides bank-notes; and the bundle of papers. The two keys the master-key with which the girl had opened the outer door, and the ingenious instrument with which she had manipulated the lock of the safe were actually found in Turner's hands.(198頁右-199頁右)

(上から音が聞こえてきた、まるで重い家具が倒れたような音だった。女性を押しつけて、刑事は階段を駆け上がり、私たちも後に続いた。最初の踊り場にはドアが2つあり、彼によって開け放たれていた。そして、彼はぐるっと曲がり、左にある階段を3段跳び上がり、奥のドアへと進んだ。彼はドアノブを回し叫んだ「鍵がかかっている。奴はここだ。Pankhurst、このドアをぶち破れ。」

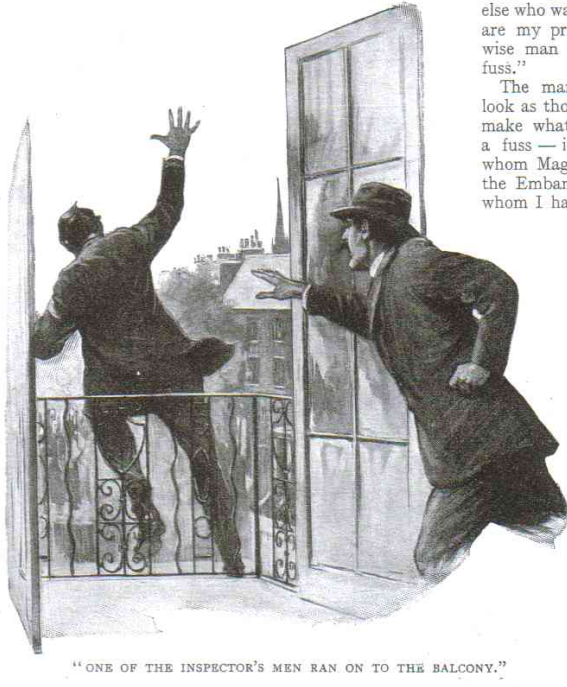
外で会った4人の1人、とても大柄な男が突進して行った、それだけでドアはまるでマッチ棒のようにふっとんだ。次の瞬間、私たちは部屋へとなだれ込んだ。そして誰かが叫ぶのが聞こえた「気をつける! 奴は窓から跳び下りる気だぞ。」

私が入ったちょうどその時、Argus 教授と呼ばれた男が跳び下りた、止めようとする直前だった。小さなバルコニーに通じる古い様式のフランス窓があり、私が入った時、開いていた。背の高い男の姿がそこを通り過ぎ、そして消えるのが見えた。刑事の部下の1人が

A great, big man, one of the four who had met us outside, went rushing forward, and information, was cold and
 "Two of you men go him." He

else who was are my priss wise man y fuss."

The man look as thou make what a fuss — it whom Magg the Embank whom I had



"ONE OF THE INSPECTOR'S MEN RAN ON TO THE BALCONY."

犯の意思が自殺したかったのか、警察から逃れるために無理をただけだったのか、定かではない。男のポケットからは、薄茶色の紙包み、それは Maggie Harris が Montagu 氏の金庫から持ち去るのを私たちが見ていたもので、中には未加工のダイヤが数多く入っていた、そして布製のかばん、その中には約100ポンド分の金貨と銀行券があった、更に紙幣の束が見つかった。2つの鍵 彼女が外のドアを開けた万能鍵、と金庫の錠を容易に処理した精巧な道具は、そのまま Turner の手の中から見つかった。)

バルコニーへ駆け寄り、低い手すりの下を見た。「奴は忍び返しにぶつかって、中庭の向こう側に落ちたようです。全く動きません。」

この報告に答える Ellis 刑事の声は冷たく事務的だった。「君らのうち2人が下に行って、男の後始末をしなさい。」彼は部屋にいたもう1人に向かい「お前はもう捕まったんだ；お前が利口ならば、騒ぎを起こさないだろう。」

そう言われた男は、刑事が口にした騒ぎということを起こしそうにはなかった その男が Turner、Embankment Gardens で Maggie Harris が逃れようとした男、レストランで忌々しい計画を立てているのを私が見た男であった。彼の共謀者、主犯は死んでしまった。主

時室之上層忽作巨響。如椅案之掀倒者。伊立司即自樓下疾馳而上。余與博士繼之。梯級盡處。向左一門未閉。伊立司已先入。余等復繼之。倏忽不知所在。第聞大聲曰：“彼等乃在此室中。”旋即有聲甚厲。吾知伊已破門入矣。余等入室時不見伊立司。一不相識之大漢。方捕一男子曰：“汝若慧者。弗為無益之抵抗。”其人果不抵抗。吾識之。蓋拖那也。未幾。伊立司自外入。謂：“亞虬健甚。幾免脫。吾已鎗斃之。”旋於拖那衣囊中搜得紙裹皮篋。檢視之。為未琢之金剛石一包。及銀行紙幣多許。而夏麗用以啓門與鐵箱之鎖匙亦在焉。吾儕見罪人斯得。即遄歸。被捕之拖那若何處置。不暇問也。(9頁下-10頁,句点是原文のまま,コロン・引用符は補った,以下同)

(その時、部屋の上の階で突然、家具が倒れるような大きな音が起こった。伊立司は1階から駆け上がり、私と博士も後に続いた。階段を上がりきった所で、左のドアが閉まっていなかった。伊立司が先に入り、私たちも後に続いた。すぐに姿が見えなくなり、大きな声だけが聞こえた「奴らはこの部屋だぞ。」その途端、激しい音が響いた。彼がドアを破ったのだとわかった。私たちがその部屋に入った時、伊立司の姿は見えず、面識の無い大男がちょうど1人の男を捕えて話していた「お前が利口なら、無駄な抵抗はよすんだな。」男はそのまま抵抗しなかった。その男は拖那だとわかった。ほどなく、伊立司が外から入ってきて言った「亞虬は激しく暴れて、危うく逃げられかけたので、射殺した。」その場で、拖那のポケットから紙包みと革製の小箱が見つかり、調べてみると、未加工のダイヤの包みとたくさんの紙幣が入っていた。また、夏麗がドアと金庫を開けるのに使った鍵もあった。私たちは犯人が捕まったのを見て、その後帰宅した。逮捕された拖那がどう処分されるかを尋ねる時間は無かった。)

大きな改訳と共に、大幅に省略されていることがわかる。特に、亞虬(Argus)を射殺してしまう個所は、意図が不明なひどい変更で、きちんと訳するのが面倒になったのだろうかと思者の翻訳態度を疑っ

てしまう。

2-3

Judith Lee ものの最初の日本語訳は、前掲拙稿でも述べたが、乾信一郎訳『ただの偶然?』(押川曠編, 乾信一郎訳『シャーロック・ホームズのライヴァルたち』(早川書房, 1983年10月15日/2000年9月15日二刷)収 『Was It by Chance Only?』の訳)である。中国語訳に遅れること約70年である。ただ、中国語訳者の関心は、タイトルにもなっている通り、催眠術という犯行手段に偏っているようである。そのため、主人公の読唇術が無視され、その部分の面白さが減ってしまったのは残念である。惲樹珏も、《蔓陀羅克》の訳者も、読唇術そのものが中国では浸透していないと見ているのであろう。ちなみに、Strand 誌では、Vol.43-No.253(1912年1月)に、“Director of the Association for the Oral Instruction of the Deaf and Dumb(ろうあ者の口頭教授協会の指導者)”の肩書きを持つ C.Sibley Haycock による『Lip-Reading The Art of Judith Lee』(読唇術 Judith Lee の技)という記事を掲載し、読唇術の啓発を行なっている。

3. 《花冠上之鏽券》の原作

《小説時報》第二十七号(有正書局, 1916年7月)に《滑稽小説 花冠上之鏽券》(南瑚訳)なる短篇作品が掲載された。書名下に“what fell on her hat. by richard marsh”とあり、原作名・原作者ともに記されていた。この度、掲載誌が判明したので改めて以下に述べる。原作は

What Fell On Her Hat.

By RICHARD MARSH.

Illustrated by Nora Schlegel.



『What Fell on Her Hat』(原作者 Richard Marsh)、掲載誌は『The Strand Magazine』Vol.51-No.304(George Newnes, 1916年4月)。Marsh は1915年に亡くなっており、彼の遺稿である。訳者“南瑚”は未詳。

3-1

主人公の思い出話のように語られる原作のあらすじを述べる。

ある風の強い日、私(Dennis)は帽子を手で押さえながら通りを歩いていた。突然何かが帽子にひらひらと落ちてきた。見ると5ポンド紙幣だった。19歳で賃金の少ない私は大変驚いた。本物だろうか等と考えつつ、どこからやって来たのか見つけようと思ったが、通りには誰もいなかった。私は4時に Netta とお茶を飲む約束をし、その場所に向かっていた。通りの両側は高層住宅が並んでおり、中のどこかの窓から落ちたのだろうと思った。近くに「9」と記された建物があり、入口が開いていた。その門番に尋ねようとし、中に入ったが、誰もいなかった。

短篇名譯

小説精 花冠上之鈔券 what fell on her hat by richard marsh

(音・通)

一日、余歩行街上。兩手緊握。余帽。因風。力殊惡。頗使人困苦。而行近街之轉角。其風更大。時余陡覺。有物。忽然。鼓翼向余。輻飛。余以爲此物必係廢棄之紙片。隨風未嘗見。過此多數之五鎊紙幣也。質言之。吾亦從來未曾使用此等紙幣之謂也。以余之意度之。此五鎊紙幣。恐未必真。然見此紙幣。顏色甚白。其質甚脆。且繡。余故未據棄之。余思。此券或爲偽造。或僅摹倣。或爲別物。然印刷之花紋。殊妙而美。好然則。余將以若何處之耶。



嘯。來耳。余乃從帽上取視之。噫。此非一五鎊之紙幣耶。此時。余甚懷惡。蓋余殊無辨此五鎊紙幣之專門眼力。余年今尙未及十九。而余之薪水之資數。又甚薄。余殊

エレベーターがちょうど下りてきて、若い男(Hereward)が出て来た。彼は私を見ると、帽子を取った。親切そうに見えたので、「5ポンド紙幣を失くしませんでしたか?」と聞いてみた。彼はあちこちのポケットをまさぐり、笑顔で「大丈夫、でもなぜ?」等と言ったので、紙幣の来歴を話し、手渡した。彼は受け取ったが、話をする間、紙幣を見ずに、私を見ていた。その笑顔のせいで、私も笑ってしまっていた。彼は「私の伯母(叔母?, Mrs. Patison)に会いに行きましょう」等と言った。なぜと聞く私に、伯母がよく物を置き忘れることを詳しく話した。4時の約束のことを話し、長居はできないと伝えたが、彼は話をそらしたり、伯母に直接尋ねるよう言った。そして言われるままエレベーターで上へ進み、その家へ入

った。

部屋には大柄な女性が座っており、数匹の犬がいた。彼は使用人にお茶を入れるよう言い、口をはさもうとすると、犬のことに話を移した。一言も話せないまま、勧められるままに椅子に座った。大柄の女性は私を見て「貴女に会った記憶は無い」等と話した。彼が「そこなんです、彼女の興味深い話を聞きましょう」等と紹介したので、私は赤面してしまった。そして一言話すごとに、伯母は質問をし、彼も口をはさむので、話はなかなか進まなかった。ようやく5ポンド紙幣まで来た時、お茶が運ばれ、話が中断した。私は紙幣を出し、伯母に見せ「失くしませんでしたか?」と尋ねた。伯母は驚いて否定し「私はとても注意深く、物を失くしたことは無い」等と話した。私が「甥御さんがそう言いました」と言いかけた所、伯母は「貴女をからかっているんだ」と言った。そして、慌てた様子で部屋に入って来た新来の女性客に「McCartney さん、ご機嫌いかが?」等と話しかけた。客は挨拶を述べた後、「少し前にととても奇妙なことがありました」等と話し始めた；家の窓枠に何か引っ掛かっているのに気付き、よく見ると5ポンド紙幣だった、すぐに風で飛ばされて行った。「どこに行った?」と声のはさまれたので、私は跳び上がって「私の帽子の上です」と言った。彼が口をはさみ、客に私を紹介し、5ポンド紙幣の話を簡単にして、客に実物を示した。私が「貴女が失くした物ですか?」と尋ねた所、客は否定し、紙幣が引っ掛かり飛

んで行くのを見ただけと答えた。彼が「謎は深まった」等と口をはさみ、私にウインクしたので、私は「約束があるのでここに置いていきます」等と冷たく言った。すると、彼は「そうすれば自分を使ってしまう」等と言い、伯母は「持主が見つかって、失くしたのは10ポンドだったと言い、自分に残りの責任を負うよう主張することもあり得るので、置いていかないように」等と言った。困惑する私に対し、彼は「貴女と一緒に通りの両側の建物を一つ一つ尋ねて回りましょう」等ととんでもない提案をした。私がばかげていると言おうとした時、使用人が入って来て、料理人が興奮して自殺までほのめかしている等と伝えた。驚いて跳び上がった伯母が理由を聞くと、「料理人は5ポンド失くしたそうです」と答えた。私たち全員が跳び上がった。私は「どのように? どこで? いつ?」と尋ねた。使用人は「休日のために銀行から引き出し、テーブルに置いて封筒を取りに行き、戻ったら紛失していた；台所のあらゆる所を捜したが見つからない；休日を台無しにするくらいなら死んでしまいたい」等と料理人の話を伝えてくれた。私はまっすぐ台所へ行った。窓が開いており、風が吹き込んでいた。私は料理人に「テーブルの5ポンド紙幣は、貴女がドアを開け放していたので、風に飛ばされ外に出た、McCartney 女士の所をかすめて、私の帽子に落ちてきた、さあこれです」等と言い、紙幣をテーブルにたたきつけた。料理人は私を見つめるだけだった。

私が約束の場所に着いた時、Netta は不平を並べて「何をしたの?」等と尋ねた。「5ポンド紙幣の持主を捜していた」と答えた。私はこの中でより大きなものを見つけていた。それは Hereward だった。あの風が弱かったら、私は別の人と結婚していただろう。

約束があり焦る主人公、無遠慮であるが悪気は無い伯母、主人公と話すのを楽しむ甥、の3人が延々と続ける会話が面白く、物語の展開も悪くないと思う。ただ、2人の結婚を述べる最後について、途中の伏線も見出せず、突然すぎる感じなので、やはり結末が不自然なように思える。原作者の遺稿なので、或いは推敲途中の部分があったのかも知れない。

3-2

翻訳について述べる。他に訳されていた場合の原作探しの参考になると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Dennis	頓奈司
Hereward	海拉
Patison	勃的生
Netta	奈陀

書名について、原作「What Fell on Her Hat」(彼女の帽子に落ちたもの)を“花冠上之鏘券”(おしゃれな帽子の上の紙幣)としている。穏やかな改訳だと思う。内容については、後半に省略が多く見られる。展開は変えないが、読者を楽しませる、登場人物の無邪気な会話がかなり略されているので、面白味は減じて

いると思う。

まず改訳(或は誤訳)を挙げる。主人公が伯母に紙幣を失くしたかを尋ねる場面である。

“ I didn't I don't know how it came there, but it was there, and I asked your nephew if he had lost it, and he brought me up here to see if you had. Please, have you? ”

“ Have I what? ”

“ Lost that five-pound note. ”

“ What an extraordinary question to ask! How on earth could I tell? To the best of my knowledge and belief I've never lost such a thing as a five-pound note in the whole of my life; I'm the most careful of women I lose nothing. ”

“ But your nephew told me ”
Then I caught his eye, and I was positive he winked “ that he thought you might have. ”

“ My nephew knew better; he knows that I never lose anything ever; he was amusing himself at your expense.... ” (359頁)

(「私が載せたものではありませんどのようにそれがやって来たかはわかりませんが、でもやって来たのです。そして私は甥御さんにそれを失くしたかを聞いたのです、すると彼は貴女に確かめるよう言って私をここまで連れて来たのです。さあ、いかがですか?」

「いかがですか?」

「5ポンド紙幣を失くしたかどうかです。」

「なんと意外なお尋ねでしょう! 一体どう言えばいいのでしょうか? 私の知る限り、そして信ずる限りでは、これまで生きてきて5ポンド紙幣のようなものを失くしたことは決してありませんよ。私は女性の中でも最も注意深いのです。何も失くしていません。」

「しかし、甥御さんが私に」その時、私は彼の目を見ました、彼は確かにウインクしました。「甥御さんは貴女が失くしたかも知れないと話したのです。」

「甥はよく知ってるわ; 私が決してものを失くしたりしないことを知っています。これまでにね; 彼は貴女をからかっているんですよ...」)

余即曰: “余亦不知。唯君之姪。告我。謂君有遺失物件之習。此物或恐爲君所遺。君曾否遺失此物乎。” 其姑母大驚答曰: “否。此誠怪事。吾生平未曾遺失鎊券。此言何來。嗟夫。吾乃一最謹慎之婦人也。且彼亦深知余未曾遺失物件者。此蓋海拉戲汝也。” 當吾輩言此事時。余轉目望海拉。海拉羞甚。不敢仰視矣。(9頁)
(私はすぐに「私にもわかりません。ただ甥御さんが私に、貴女がよくものを失くすので、これは貴女が失くしたのかも知れないと教えてくれました。貴女はこれを

失くしませんでしたか?」伯母は大変驚いて答え「いいえ。とても意外な話ですよ。これまで生きてきて紙幣を失くしたことはありません。どこからそんな話が出たのでしょうか? ああ、私は大変注意深い女性です。それに彼も私がものを失くしたことなどないのはよく知っています。きっと海拉が貴女をからかったんですよ。」私たちが会話している時、私は海拉の方に目を向けました。海拉はとても恥じ入って、顔を上げられませんでした。)

原作はこの場面でも甥の変った性格を示しているが、翻訳は真面目な甥になっており、逆にここだけ真面目にするのは前後と合わず、おかしい感じがする。次に、本作も最後が大きく改められており、その部分を挙げる。

“ I've been finding the owner of a five-pound note, ” I said.

As I dropped down upon a chair, and took my gloves off, and had another tea, I felt as if I had been finding a great deal more than that. And, as it turned out, so I had. I had found Hereward. How trifles can alter lives! Everybody must have noticed that. A puff of wind the less, and I should have married someone else! (361頁右)

(「私は5ポンド紙幣の持主を捜していたのよ。」と言った。

椅子に座り、手袋を取り、別の紅茶を飲んだ時、まるで自分がそれよりもたくさんのことを捜していたみたいだと感じました。そして結局、その通りだったのです。私は Hereward を見つけていたのです。どんなに些細なことでも人生を変えることがあります。誰もがきっとそのことに気付いたことでしょう。あの突風が弱かったなら、私は他の誰かと結婚していたでしょう。)

余答曰：“余往尋飛來鏹券之主人去也。”於是入座。飲此第二次之茶。余心中此時樂乃彌甚。髣髴吾又發現一比尋出鏹券主人之事爲更有趣味。然究爲何事。吾亦不知。意者其心理之作用也耶。(11頁)

(私は答えて「私は飛んで来た紙幣の持主を捜していたのよ。」そこで椅子に座り、2杯目のお茶を飲みました。私の心はこの時、とても楽しい気分でした。まるで紙幣の持主を見つけたことよりももっと面白いことを見つけたようでした。しかし、それが一体何なのかは私にもわかりません、心の働きというものでしょうか?)

上にも述べたが、原作自体が突飛すぎと思うので、翻訳もそれに戸惑ったのか、2人の結婚には一言も触れていない。そのため、とても中途半端な最後になっている。

3 - 3

翻訳には訳者の付記があり、

於此可以見彼都人士取與之不苟。雖滑稽小説中。得窺其國民道德精神之一斑矣。(11頁)

(本作から彼の地の人々は拾得物のやりとりでもおろそかにしないことがわかる。滑稽小説の中ではあるが、国民の道德心の一部がうかがえる。)

とある。つまりは、この、登場人物に悪人がいないという要素もあり、物語のわかりやすさと併せて、原作発表からわずか3か月で翻訳・掲載されたのであろう。

4

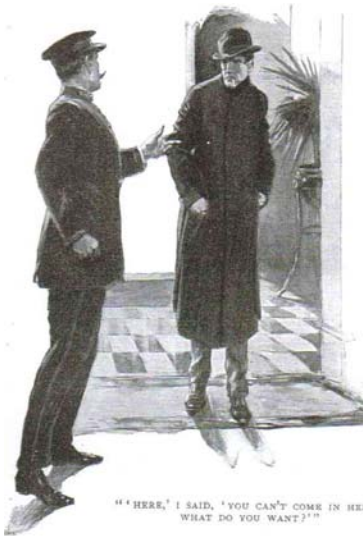
現在までに判明している Richard Marsh 作品の民国初期における翻訳をその発表順に表にまとめる。(別掲)

1914-17年の間に8作訳されているのは、決して少ない数ではないと思う。内容も、ユーモア、女性探偵、スリラー、戦争と多岐に渡り、Marsh の流行作家ぶりが翻訳からもうかがえる。ただ、原作者が Marsh だと明記されているのは《花冠上之鏹券》のみなので、中国ではほとんど知られなかったようである。Marsh の著作は数多く、他にも翻訳が埋もれていると思う。本稿を機に、その掘り起こしが進むことを期待する。 罫

中国語訳	訳者	掲載誌	原作	掲載誌等
紙牌	英蜚, 餅庵	中華小説界 1-1(1914.1.1)	A Pack of Cards	『The Seen and the Unseen』(1900年)収
催眠術	鐵樵	小説月報4-12 (1914.3.25)	The Affair of the Montagu Diamonds	Strand45-266(1913.2)
吾血沸矣	冷風, 鐵樵	小説月報7-2 (1916.2.25)	Sam Briggs Becomes a Soldier	Strand49-289(1915.1)
獻身君國	鐵樵	小説月報7-3 (1916.3.25)	同上 . A Man in the Making	Strand49-290(1915.2)
戰事真相	鐵樵	小説月報7-3 (1916.3.25)	同上 . Baptism of Fire	Strand49-292(1915.4)
花冠上之鏘券	南湖	小説時報 27(1916.7)	What Fell on Her Hat	Strand51-304(1916.4)
有聲有色	鐵樵	小説月報8-5 (1917.5.25)	The Photographs	『The Seen and the Unseen』(1900年)収
蔓陀羅克	陸秋心	小説月報8-8 (1917.8.25)	Mandragora	Strand44-260(1912.8)

【注】

1) 余談であるが、この場面には挿絵がある。ただ描かれている男は黒い帽子・黒いコートを着用し、全く金髪には見えない。絵師が次に登場する男と取り違えたのかも知れない。



““ HERE,” I SAID, “ YOU CAN’T COME IN HERE WHAT DO YOU WANT?””

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》浙江古籍出版社, 1993年5月
梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》中華書局, 1997年2月

Callum James 「Why Was Richard Marsh」
『Wormwood』14, Tartarus Press,
2010年4月

Scot Peacock(Project Editor) 『Contemporary Authors』 Volume215, Gale,2004年
William G. Contento 管理 HP 「The Fiction Mags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2013年1月8日確認)

渡辺浩司「《滑稽小説 紙牌》の原作」,
『清末小説から』92, 2009年1月1日
『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』
収

渡辺浩司「《蔓陀羅克》の原作」,
『清末小説から』94, 2009年7月1日
『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』収

渡辺浩司『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』
清末小説研究会, 2010年5月1日
渡辺浩司「Sam Briggs の中国語訳」,
『清末小説』34, 2011年12月1日

张葆常的少年中国和废汉语论

傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(五)

姚 达 兑

张葆常撰写的《鸦片 时文 缠足》一书参加了本次“时新小说”征文比赛。该书未获奖，手稿收入《清末时新小说集》第十二册*1。未获奖的原因可能是：行文是匆匆而就的应试之作；所用文体更像是论文，而非小说。事实上，几乎所有的参赛作品或多或少都有这两项毛病。该小说内容分三部分，各部分针对一个批评的对象，立题而逐渐破题、解题。另一个不合征文要求之处，便是文体。傅氏征的是小说，而在这一文学事件中，参与的传统文人还未意识到现代小说之为小说的文体问题，而局限于传统意义上的“说部”观念——“虽小道，必有可观者焉”。张葆常的参赛作品，行文中举了不少故事为例，但整体上有名无实，并非现代意义上的小说。

1、生平略考

张葆常(1856-?)，字子贞，浙江人，常居海宁、杭州两地，教籍属地为海宁州小东门外教堂(参赛作品前署有此名)。在参加完傅兰雅小说征文后，他经常在《中西教会报》和《通问报》(上海)上发表论

说。他与许多传教士一样，喜欢以小论文，宣传基督教教义。这也可能是因为刊物风格的问题。《中西教会报》主创人员都是传教士，如林乐知等，刊发的文章也旨在针砭时弊，以基督教的眼光观察中国并提出建言；稍晚一些的《通问报》专辟一栏“论说”，功能也非常相似。其所附小字说明如是：“本报论说均以《圣经》为宗旨，深切著明，有关世道，决无旁门左道，悖逆之言。况各论大半出于各处中西名人之作，并非本馆一己之私见也。”(每期皆有此说明)

涉及张葆常生年的材料有二则。一是参赛小说中含糊其词地说作者三十余岁(页11)。此则因系小说家言，不能就此坐实。二是1919年6月，他发表于《通问报》的文章《今日学生正是异日民国主人翁》涉及了他的生年。他说，“与鄙人之浮生六十三岁者……”，此则材料交待年龄如此确切，应属真实，故可断定他出生于1856年*2。张氏在杭州、海宁等地活动，有几则材料可证，依次罗列如下。一是1891年他在《通问报》上报导了最近发生的几宗教案。他特地提及了1891年5月(安徽芜湖)焚毁教堂一案带来的社会反响，以及官府对此的回应，并在该文结束处向上帝祈祷，表达了避免教民冲突的希望*3。1891年是教案频发的年份，在皖浙和长江中下游地区，爆发了一系列排外、排教事件，被煽动的群众愤然而起，焚毁教堂、驱逐传教士。这些教案总称为长江教案。二是他在1906年的《通问报》上发表的《崇孔子论》一文。该文是“读浙抚通飭各属文有感”而作。文中表露了他的“孔子加基督”主张，和反对当时西化的中国基督徒排斥孔子的极端

态度。“仆等耶教中人，食毛践土，虽以昭事上帝为宗本。然而于古圣先贤，亦未尝不奉为师傅。……所愿我教会子弟，以坚忍之心，守主训，更以合宜之道尊孔子，斯得矣。*4”第三则是1914年，他在《通问报》上发表通告，通知全浙江省教徒的聚会地点*5。由这则材料，可推知他在浙江省教会组织中的地位，若非领导人也是主要负责人。

张葆常后来还当上了《通问报》（该报发行年份：1902-1950年）的董事。王治心《中国基督教史纲》载，“通问报，乃长老会机关报，始于一九二二年，由吴板桥主政，陈春生任编辑，每星期出版一次，以有光纸印的单张。专载全国教会消息，行销甚广”*6。据《中华基督教会年鉴》载，1916年2月29日《通问报》召开了董事会会议。“到会者罗炳生、毕来思、金多士、张葆常，王完白等七人，并邀记者吴板桥、陈春生同座。……举定职员后，吴、陈二君报告一年之经过。略谓该报行销中国各省、海外多国，投稿新闻既多且速，教报中以该报销数为最多。*7”引文中的人名，各有来头，经笔者查证后，略举如下。罗炳生（1872-1958, Edwin C. Lobenstine）、毕来思（1864-1954, P. Frank Price）*8，金多士（McIntosh, Gilbert, 1861-?）*9，三人皆属于美国长老会来华传教士。董事局的华人只有两位，除张氏外，便是最年幼的王完白。王氏是教会医生，也是常州福音医院的创办人*10。两位记者，一中一洋。洋记者吴板桥（1856-1926, Woodbridge, Samuel Isett）非常著名。他曾将张之洞的《劝学篇》译成英文，题为“Learn!”。该书不久在纽约重版，增添了不少内容，并改题名

为《中国唯一的希望》*11。两版皆附有著名传教士杨格非（John Griffith, 1831-1912）的导言。另一位记者陈春生，后来做了该报的主编。陈春生是著名的报人和小说家。译著了不少书，尤以《伊朔译评》（《伊索寓言》）和（与亮乐月合译）《五更钟》两部最为著名，多年热销不断，重印不少次*12。上面提及的会议，与会人员中唯有张葆常与陈春生与基督教文学极为密切相关。

2、少年中国

张葆常参赛的小说，其内容并无出彩之处，作为小说也非成功之作。行文中的故事在同时期杂志或参赛的作品中，易为见到。作者在批评三弊的同时，还表达了他较为强烈的民族主义情绪，也如其它参赛小说一样采取了“揭露时弊 给出医方”的模式，提出了自己的解答方案。这部拙劣的小说，从审美方面看可能不具文学史的意义，而其行文所提出的观念，却深具文化史的意义。

首先，他在参赛小说中，指出了明清时《圣谕》的社会功能已失效，但是传统的布道和忏悔方式仍可借用，内容则应替以之《圣经》。明清《圣谕》流传几百年，其布道和忏悔方式，一般清末民众也较熟知。《圣谕》及其拾遗之作，到清末时已是儒家教条和清政府意识形态的象征*13。圣谕如同时文一样僵化，其宣讲过程中，讲者和听众仅是按样作文章，缺乏具创造力和改造人心的作用。故而小说中作者宣告《圣谕》宣讲之功能失效的同时，也指出了其戒烟方式的无效。作者在一个小故事里，提及了他与杭州某位王司务（国家官员？）的对话。“日前，我在庙中，恭听台

上一位官，读《圣谕》兼戒烟的话。说得痛快流利。台下的人，半为他流泪。迨至退而省其私，知该官每日足须烟钱三百文。”（页13）《圣谕》旨在劝人向善，基本原则是儒家的修身法门，在此则变成了程式化的高头讲章。《圣谕》的失效，与儒家伦理在这个社会的功能失效同出一理。所以作者认为当务之急是要将宣讲《圣谕》替之以讲习《圣经》。如此便符合了傅兰雅征文中要求参赛小说要使用“基督教腔调”的标准。

另一个例子也可证明作者在行文中隐含了“基督教腔调”，其论式是：天下一家，上帝为天下之大主。张葆常在许多文章中，都表达了一个相似的观点：天下四海一家。即天下是上帝的天下，而中国包含于天下之中，每一个个体的家庭又包含于中国疆域中。故而作者在抨击鸦片和缠足带来的危害时，又作如是质问：“四书说，天下一家。天下尚说一家，中国不更是一家了吗？一家之中有吸烟的人，弄得倾家荡产，妻号子哭，我们同国的人，难道不休戚相关，痛怀在抱呢？”（页15）这种“家国天下，齐归于上帝”的观点，有传统的根源，但是更加入了西方资源，即圣经的内容。这个观点在他后来的其它文章中，得到了更充分的阐发。发表于1914年《通问报》上《四万万同胞说》一文中，他提出全中国四万万同胞应当一齐学习三方面内容：一当知有博爱之量；二当知有平等之义；三当知有乐群之道。在结论中，他又指出：“况今日基督降世，圣教西来，阐明天人之真理，益觉父子之至亲，不第寻常人共相友爱，且当视仇敌如兄弟，试观天父以日照。夫善不善者，以雨濡夫。义不义者，

一视同仁之德上天有之。基督教人法天父，而为完人。更觉四海皆知己，天涯若比邻。而上天下地，且联为一家，何乐如之。*14”可以与“家国天下联为一体”平行论述的观点，是个体即国体的象征。张葆常首先论述了个体所涉三弊问题，进而是影响到了国体的衰弱，最后提出了使国体强健的解决方案。他认为戒烟需先戒心，而心诚则上帝自会帮助消除祸业。在小说中，作者云：“古人有言曰：戒烟须戒心。心如不戒、未戒的，恐防不肯戒；既戒的，恐不果戒。故为中国计，务须以天道端正心术，为第一要着。令人敬畏上帝，依靠救主，以天堂永福励作善之荣贵，以地狱永殃，警作恶之苦报，于是怀德畏威，悔罪改过，夫而后此以既正，斯患永消矣。”1906年，张葆常作《论人之为人》一文，论列了人与物与神的关系，并认为“人之为人”的实现条件，便是事奉上帝。他的结论是：“故今日中国而欲复人之本位，其必认识独一真神，而单单事奉之，为第一要义。*15”如此论调，也真可谓得基督教之腔调。可见，傅兰雅举行征文的的目的，即培养一批以“基督教腔调”写作文章的新型知识分子，事实上还是颇有成效。

在张氏看来，如果个体不信上帝，并且堕落到吸食鸦片（或沾上其它弊病），则会变得暮气沉沉，这样的个体如同帝国的缩影，因而鸦片也便成了老大帝国的象征。将鸦片与老大帝国的残弱形象相互等同。这种观点要比梁启超在1900年《清议报》上发表的《少年中国说》稍早。梁启超声称：“老年人如夕照，少年人如朝阳；……老年人如鸦片烟，少年人如泼兰地酒。*16”“过去-老年-帝国”与“未来-少年-中国”这两种

论式的对比，早就出现在张葆常写于1896年的参赛小说中，也在其后来的论说中重复出现。可见“少年中国”是当时新知识分子共同召唤的愿景。

张葆常在小说中声称，要使老大帝国返老还童，则必须吸取国弱被欺的教训，向强邻日本以及西方学习。“看日本，倘令食古不化，蕞尔弹丸，不过今日之朝鲜耳。今且与堂堂中国羞为伍焉。中国若一返观而自新也，当何如哉？”（页39）又如：“况今日者，泰西诸国，实逼处此。考其制造之精工、创作之奇妙，以我中国比之。直是未闢之洪荒，救之起之、变化之，直当如赴汤蹈水之急，唯恐不及，还可袖手旁观，空口饶舌，谁秉国钧，谁执其咎呢？”（页36）在1908年发表的一篇文章中，张氏起文先论中国何为“老大帝国”，次则点明是文之作乃有感于清廷派遣大量学生出洋一事。他着重提及了赴日本访学的中国青年，对他们寄予厚望，希望他们能好好学习，品学兼优归来救国。“果尔，则中国居然有返老还童之一日。诗曰：‘周虽旧邦，其命维新’。吾于大清亦咏焉矣。*17”故而，学堂少年，便是国家的未来。少年作为新生力量，以改变死气沉沉的老大中国。这种论述在二十世纪中国民族主义话语中，一再重现。截至五四，这种青春救国话语走到了第一个颠峰。在1919年6月，正是五四风起云涌之时，他写了《今日学生正是异日民国主人翁》一文。文中开篇即称“帝国已称老大，民国正在芳龄，两两适当，过度时代，往者过、来者续，无一息之停”*18。他在此文中指出，现时的青壮年大半是生于前清，故而身份归属半是清人半是民国人，而唯有现在的学生才是明日

民国的主人公。如是，“少年中国”的主题昭之若揭。“吾华人夙具灵敏，早经欧美所钦羨。吾是以不患国人之无知觉，而患国人之不道德。若能相辅而行，则贞固不摇，方有持盈保泰之实际，万不至徒逞一腔热血，而茫然从事者比也。尤鄙人所隐晦为今日学界诸子颂祷者也。*19”引文中所指的“道德”，其源头仍然是指《圣经》，而非传统中国的以儒家理念为宗的道德。这是他对青年的期望：要强国，必先强壮青年，使其学习基督教，跟从上帝。

傅兰雅要求参赛者以基督教腔调（新文体）揭出三弊，而张葆常在参赛小说和其它论述中，将“未来-少年-中国”三者相互钩连，最终指向了基督教的拯救主题。与这一状况对应的正是清末民初的一个常见的文学现象：文体改良、身体书写和国体召唤三个主题的交相关涉，相互辩证*20。与后来的梁启超的论述相似，张葆常也在呼唤一个新的民族国家的产生，但不同的是张氏的最终愿景是基督教的世界。

3、通用语和废汉语

需要特别指出的是张葆常在参赛小说中批评时文的同时，认为不仅需要废除时文，而且必须重新考虑书写的语言，即寻求一种新的通用语。时文的参赛者批评时文的无用，固是情理之中，然而像张葆常这样表达了要统一语言、语音，甚至废除汉语的论述，却几乎未见。笔者推测，张氏在参赛时，已与不少传教士非常熟悉。中国各地语言不一虽是众所周知之事，而唯有传教士才对这种情况大发抱怨。许多早期的传教士发现他们到本地所学的语言只是方言，并非通行全国的语言。他们不

禁因而大发议论，并认为当务之急，即是统一中国的语言。汉语罗马字化便是传教士们早期的尝试之一。张葆常的语言观念，可能便是听自传教士，才会意识到通用语言的急需。他在参赛小说中说，“日今中国，不特时文当绝，即字样方法，还须另加酌夺。”（页39）。理由之一是汉字的书写和学习，比西国语言文字要难。“为要中国字样，以撇点横竖、捺钩转挑、分合配搭，为字数万，不若西国二十六字母，配合成数，万言之为妥，然则中国字样既多，而文法又奥，人生寒暑数十载，事务盈千万，那有这等工夫去习学。”（页39）这种口吻，更像是初来中土的传教士学习汉语时的抱怨之语：哪有工夫去学习汉语，不如统统改为欧西语言，直接传道更好。中国二十一行省中方言之间的差距之大，仿若欧洲几种主要语言之间的差别。“苦于语言之不一，然则势又不可行，故国家若善变，其他学问在后，倒先要讲求文字清楚。为今之计，愚以为一国之中，莫如通用官话。”（页39-40）张葆常的第一建议是先废除各地方言，统一用官话。其次是在教育系统中使用官话。“将西国天文地理、格致算学等书，胥译官话，令童年男女，自少操官音、习官字，不数年，便能通书达理，不特文字通行，即语言亦能一辙。”（页40）为了说明通用语官话的方便，他举了一个例子。“余曩在临安传道，苦乡谈之不懂。幸一人能操官音，遂不觉津津而乐道，故愚以为此尤其是学问中第一要着也。果尔，信所谓书同文，行同伦，一道同风，不同乐大同之化矣。”（页41）所谓“一道同风”，“风”者，不止指儒家风化之风教，而且也指基督教的“圣灵”。

这一段提倡语言改革，推广使用官话或者通用语的观点，在张葆常后续的文章中，有更进一步的发展。1909年的《青年》杂志上，刊载了他的《英文当为阐道之用》一文，主张放弃使用汉语（无论是官话还是方言），直接使用英语作为通用语言，以阐道传道。这一观念无疑是后来陈独秀、钱玄同等人的废汉语论调的先声。

《英文当为阐道之用》一文，开篇是《圣经》中巴别塔的故事，讨论语言混乱带来的难以沟通的问题。“自旧约载古人建巴别塔，真神特乱其口音。自兹肇祸以来，于是不第人与神相睽违，不克通识达意；且人与人亦隔膜，未能促膝谈心。*21”缺乏通用语，则不但彼此无法沟通，而且容易产生文化冲突。张氏说，“使徒若但以土人说土语，是我将以言者为夷，言者亦将以我为夷。”这也是清末中西双方互责对方为野蛮人的写照。缺乏通用语，也无法将基督教教义传播到世界各地，张氏所说：“圣道将局于一方，众人将格于成见。信徒安能星罗棋布，而弥漫于天地间耶？然则圣灵之大赏赐，其即在语言交通，阐发语音，为第一大关键可知也。”《新约》[徒2:4]有金句如右，“他们就都被圣灵充满，按着圣灵所赐的口才，说起别国的话来。”讲的正是圣灵赋予传教士语言的天赋，讲起方言来，而最终的目的则在于将基督福音传遍全世界。这一金句的观点与张氏使用通用语的观点是相反的，虽然两者同样强调了语言的重要性。张氏认为最好使用英语作为通用语，可能是因为他接触的传教士大都是使用这种语言的人。他举了自身经历的事作为一个例子。他曾去香港上洋参加一个夏令营。当时“一广东兄弟，思浙语

之不相问闻也，于是尽以英语一表其热衰。”英语在这里充当起沟通粤语、浙语使用者的通用语。最后，张葆常又认为，真正的语言，无论是书写还是口头，都应以荣耀上帝的目的而使用。与他在参赛小说中使用较为浅显的白话叙述不同，张葆常的论文往往用半文言写作，而论文的结论总是用文言。这一篇的结论是：“保罗云：‘尔曹或食或饮，皆宜为神之荣而行。’今吾亦云：‘尔曹或言或语或书，亦宜为神之荣而行。’庶几哉。海内皆知己，天涯若比邻。将胥天下咸归大同之化矣。”虽然这篇文章比起参赛小说而言，更为激进地要求废除汉语，使用英语，但是两者都指出，其终极目的乃在于“大同之化”。有趣的是这个“大同之化”，不是儒家理念意义上的“大同”，而是全世界被基督化，实现在人间的“上帝的国度”。 ㊦

附：张葆常其它文章列举

1. 《今日教牧师当谨防贪婪》，载《通问报》，1906(187).1-2.
2. 《施济莫待有余论》，载《通问报》，1907(241).1.
3. 《论今日教友守道之难》，载《通问报》，1907(254).1.
4. 《中国教牧毋自菲薄论》，载《通问报》，1907(265).1.
5. 《道不择人论》，载《通问报》，1908(325).1.
6. 《长老倪美章行述》，载《通问报》，1909(377).4.
7. 《读兴华报书后》，载《兴华》，1916, 13(32).3-5.

[中山大学中文系, yaodadui@hotmail.com]

【注】

- 1) 周欣平主编：《清末时新小说集》第十二册，上海：上海古籍出版社，2011年，第1-52页。下文凡引原文，仅于引文后括号内注明，不另赘注。
- 2) 张葆常：《今日学生正是异日民国主人翁》，载《通问报》，1919, (856).4-5.
- 3) 张葆常：《杭会近事》，载《中西教会报》，1891, 1(8),26-27.
- 4) 张葆常：《崇孔子论》，载《通问报》，1906(232).1-2.
- 5) 张葆常：《浙江联会之通告》，载《通问报》，1914(596).1.
- 6) 王治心撰：《中国基督教史纲》，上海：上海古籍出版社，2007年，页237.
- 7) 《中华基督教会年鉴》“本年中国教会大事记”（1916），（据商务印书馆版重印。无重印机构信息），1996年，页华四十。
- 8) 此人后为金陵神学院教授。The P. Frank Price Collection, See George C. Marshal Foundation Archival, http://marshallfoundation.org/library/documents/Price_P_Frank.pdf
- 9) 黄光域编：《近代中国专名翻译词典》，成都：四川人民出版社，2001年，页576.
- 10) 张丹子主编：《中国名人年鉴》上海之部，中国名人年鉴社，1944年，页199.
- 11) Chang Chi-tung, *Learn!* Rev. S. I. Woodbridge Trans., Shanghai: Mercury office 1900. *China's Only Hope, An Appeal*, by Chang Chih-Tung, S. I. Woodbridge Trans., New York: the Caxton Press, 1900.

- 12) 陈春生译：《伊朔译评》，上海：通问报馆刊，1909年。亮乐月译、陈春生述：《五更钟》，上海：美华书馆，1907年、1909年。又有两次重印：1920年上海协和书局，1933年上海广学书局。最近韩国崇实大学教授吴淳邦先生撰有关于陈氏《五更钟》一文，见吴淳邦：《基督教中文小说陈春生<五更钟>中的苦难与死亡》，《试炼与苦难：中国宗教与文学的对话》国际学术研讨会 (2013.1.3-4)。
- 13) 姚达兑《圣书与白话》，载《同济大学学报》，2012,Vol. 23, No.1, 79-89.
- 14) 张葆常：《四万万同胞说》，载《通问报》，1914,(594), 6.
- 15) 张葆常：《论人之为人》，载《通问报》，1906,(224), 2.
- 16) 《梁启超全集》，北京：北京出版社，1999年，页409.
- 17) 张葆常：《学堂青年信士与国家攸关说》，上海《青年》，1908,11 (9), 265-266.
- 18) 张葆常：《今日学生正是异日民国主人翁》，载《通问报》，1919.6 (24).29.
- 19) 同上，页30.
- 20) 梅家玲：“‘国体’、‘身体’与‘文体’，亦以此交相关涉，相互辩证，其间曲折，自是耐人寻味”。氏著，《从少年中国到少年台湾：二十世纪中文小说的青春想像与国族论述》，台北：麦田出版，2012年，页11.
- 21) 张葆常：《英文当为阐道之用》，载上海《青年》，1909,12(4), 107-108.下引不注出。

《筆生花》初刊本小識

鄭 振 偉

心如女史《筆生花》抄本，現藏上海圖書館，該彈詞有陳同勳於咸豐七年(1857)及棠湖雲腴女士於同治十一年(1872)所寫之序言。然而，該彈詞早期之刊本，學界所知，一為光緒年間申報館鉛印本，有16冊本及32冊本兩種，題為《筆生花》；一為光緒二十年(1894)仲夏申江袖海山房石印本，8卷32回，共8冊，題為《繡像全圖筆生花》；一為光緒二十五年(1899年)之己亥仲夏上海書局石印本，題為《繪圖筆生花》。光緒年間鉛印本扉頁上有「上海申報館仿聚珍版印」，無出版日期，故該彈詞最早之刊本，一直只有「光緒年間」之說，除「光緒年間」外，是否有更早之刊本，無從確定。筆者近日在《申報》上看到新印《筆生花》彈詞出售 啟事，原文如下：

雜劇院本已無當於大雅，降至彈詞，未矣。然婦女輩針黹餘閒，往往束女箴閨訓於高閣，而最好取彈詞閱之，蓋以其文理淺近，易以通曉也。惟語近穢褻，如倭袍等書，實足傷風敗俗，

理宜禁絕。若情雖 而務出於正，語雖誕而弗背乎經，如淮陰心如女史所著之筆生花一書，洵為別開生面，獨運匠心者矣。此書計共三十二回，訂成十六本，其中事實，頗覺可驚可喜，可歌可詈，而仍能擺脫凡庸，獨標俊旨。據聞女史積三十年心力，撰成是書，因窘於資，未付剞劂氏，即抄本流傳亦不多見。本館茲特購取稿本，用活字排印問世，每部收回工價洋一元四角正，準於初十日發賣。伏祈賜顧。此布。*1

據此則署名「申報館主」之啟事看來，《筆生花》於光緒七年十二月初十日(1882年1月29日)正式發售，為16冊本。啟事從初八日連載至十三日，之後還偶爾刊載。申報館購入稿本，且表示原稿「未付剞劂氏」，故應可確定《筆生花》初版於光緒七年。至於12年後之光緒二十年石印本，《申報》上亦見出版啟事，題為《石印繪圖增像筆生花》告成，下署「三馬路申昌書畫室」，原文如下：

《筆生花》彈詞為淮陰女史所著，于描龍刺鳳之餘，成咏絮吟鹽之作。駢詞儷句，情文相生，久已閨閣名馳，洛陽紙貴。今特倩名手增圖入畫，付諸石印。字蹟端妍，紙色潔白，分訂八本，外加錦套，釐定碼洋一元六角，躉購格外從廉。賜顧者請臨三馬路申昌書畫室暨各書坊售報人處，均有發售。*2

該則啟事於初九、十及十二日連載，之後

數月也偶爾刊載。從該則啟事看來，書商把原來16或32冊本改為8冊本，另加插圖，這大概就是現存之《繡像全圖筆生花》。繡像全圖本之卷首有人物繡像20葉，且以每兩回為一單位，加入故事情節之插圖，如卷1前葉，葉上為第一回插圖，葉下為第二回插圖，卷3前葉，葉上為第三回插圖，葉下為第四回插圖，餘類推。

上述《申報》兩則啟事，解開《筆生花》初版年月之懸案。《筆生花》與其他新刻書刊在《申報》上之啟事，體例相近，然《筆生花》之情況較為特殊，因《申報》上另有推介該彈詞之文字，作者署名「樵李畹雲女史」，題為《筆生花》傳奇絕句三十二首，詩作並有序文如下：

余素惡傳奇小說標新立異，無非濮上桑間，才子佳人，悉是星前月下，陳言腐套，寓目堪憎，即有一二維持風化，教益倫常，亦皆略而不真，浮而不切。壬午孟春，偶閱淮陰心如女史所著《筆生花》彈詞，至性天成，逸情雲上，詞源滾滾，仙骨珊珊，循誦迴環，擊節嘆賞。其微言奧旨，藻采繽紛，曲繪深摹，賢奸畢肖。允矣，鉤心鬪角，卓哉，悟世警人，果擷裨史之菁華，洵屬閒編之傑構也。藉聞女史一生坎坷，際遇堪悲，淪落奇才，倍深惋惜。燈窓有感，雨夜無聊，走筆偶成絕句三十二章。琴憐同調，漫嗤白雪難賡，曲奏知音，遙企絳帷可拜。質諸蘭閨淑媛，繡閣名姝，其將擊唾壺而雅唱也夫！*3

該序文及詩作近乎書介，而序中提及「壬

午孟春」，即光緒八年正月，時序為《筆生花》初版開售以後。詩作主要為概括彈詞各回內容，礙於篇幅，暫不引錄。詩序及詩作佔相當篇幅，具推介作用，又從新印各種書籍出售價目所見，價目表上百多種著作，定價大都介乎洋二角至三角，但《筆生花》之定價為一元四角，故應為鉅製*4，宣傳亦屬合誼之舉。此外，「橋李畹雲女史」於第31和32兩詩間插入一段文字云：「余草創《奇貞傳》彈詞，計二十四回，甫將脫稿，其中命意措詞，同工異曲，閱竟為之粲然」，即詩序及詩作或是有感而發，並非純屬宣傳。

考《奇貞傳》署名「鶴湖逸史」，並非「橋李畹雲女史」。查該抄本現藏上海圖書館，卷前《奇貞傳》敘記「咸豐十一年歲次辛酉季冬月上浣鶴湖逸史自序于鶴沙寓樓」。筆者檢讀「鶴湖逸史」《奇貞傳》敘文以後，發現「橋李畹雲女史」詩序之開端，從「余素惡傳奇小說標新立異」至「亦皆略而不真，浮而不切」，除「素惡」二字易為「遍閱」外，跟「鶴湖逸史」敘文前數行之內容完全相同，據此可推知「鶴湖逸史」和「橋李畹雲女史」應為同一人*5。

「橋李畹雲女史」之詩序及詩作續有迴響，《申報》於兩個月後，即光緒八年四月念一日(1882年6月6日)發表了署名「曼陀羅花館安吳女史麗清王韻仙」之絕句十首，但內容大意是表示對畹雲女史之向慕，並附有詩序如下：「讀畹雲女史咏《筆生花》三十二章，清新俊逸，工切不膚，噓蕙吹蘭，字字生香，誠屬蛾眉才子，巾幗詩魁。敬慕無已，勉成俚句十絕，錄呈吟壇晒政」*6。

《筆生花》稿本得以排印出版，緣於《申報》館於晚清期間印刷各種書籍發售，從初刻到再刻相距十二年，期間有「橋李畹雲女史」之推介，再有「曼陀羅花館安吳女史麗清王韻仙」之應和，筆者翻閱《申報》之內容有限，故未發現他例。申昌書畫室「倩名手增圖入畫」，配合彈詞之敘事，儘管是當時流行之出版方式，但至少說明《筆生花》是受歡迎之讀物。罍

(澳門大學教育學院副教授)

【注】

- 1) 《申報》，第3142號，光緒七年辛巳十二月初八日(1882年1月27日)。
- 2) 《申報》，第7651號，光緒二十年甲午七月初九日(1894年8月9日)。
- 3) 《申報》，第3205號，光緒八年壬午二月十九日(1882年4月6日)。
- 4) 新印各種書籍出售價目，《申報》，第3198號，光緒八年二月十二日(1882年3月30日)，該價目表又見於《申報》，第3231號，光緒八年三月十五日(1882年5月2日)。
- 5) 同治癸酉年(同治十二年[1873])八月出版《瀛寰瑣紀》第11卷，有采白吟次韻詞並附錄絢秋軒舊艸二章(葉20)，下署「橋李曇華吟館女史金畹雲」，作者所附錄之舊作，其一為題吳中段疇五茂才悼亡詩草，其詩序云：「憶自辛酉秋杪，旋避逆氛，僑寓于鶴沙城南。」《奇貞傳》敘文後有「鶴湖逸史自序于鶴沙寓樓，故亦可佐證「鶴湖逸史」和「橋李畹雲女史」為同一人。據徐世昌《晚晴簃詩匯》所錄閩秀作家，「金芳荃，字畹雲，秀水

人，平湖候選知縣陳景邁室，有《絢秋閣詩集》」（退耕堂刻本，1929年，卷191，葉19上）。「鵝湖」即「平湖」，明宣德年間屬嘉興府，而「橋李」和「秀水」等地亦即現今浙江嘉興一帶。
6) 《申報》，第3266號，光緒八年四月念一日(1882年6月6日)。

清末小説から

黄雪蕾 Xuelei Huang From East Lynne to Konggu Lan: Transcultural Tour, Trans-Medial Translation, *Transcultural Studies* 2012. 2, Universitat Heidelberg

梁 艶 周作人とアンドレーエフ「歯痛」の翻訳とめぐって 『野草』第91号 2013.2.1

李玲、陳春華 維新報刊的“面目体裁”以《時務報》為中心 『中国現代文学研究叢刊』2012年第12期(總第161期) 2012.12.15

東山拓志 『日本の近代文学と中国の新文学 比較考察の一側面』日本・萌動社2009.9.21

尚静宏、楊亮著 『從古典到現代 中国文学演变主潮之1840-1916』鄭州・河南大学出版社2012.8

方 長安 『中国近現代文学轉型与日本文学關係研究』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2012.8

蔡 之國 『晚清譴責小説伝播研究』北京・社会科学文献出版社2012.9 人

文伝承与区域社会発展研究叢書

張曉編著 『近代漢訳西学書目提要 明末至1919』北京大学出版社2012.9

周 樂詩 『清末小説中的女性想像(1902-1911)』上海・復旦大学2012.9

趙 稀方 『翻譯現代性 晚清到五四的翻譯研究』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2012.9

WARREN GAO (高万隆) 『A STUDY OF LIN SHU'S TRANSLATIONS IN CULTURAL PERSPECTIVES 文化語境中的林紓翻譯研究』杭州・浙江工商大学出版社2012.10

(美)葉凱蒂著 楊可訳 『上海・愛：名妓、知識分子和娛樂文化 1850-1910』北京・生活・讀書・新知三聯書店2012.11

森岡優紀 『中国近代小説の成立と写真』京都大学学術出版会2012.11.5

『清末小説から』第107号 2012.10.1

商務印書館の名称と日中合併問題1樽本照雄

《劍光蝶影》の原作渡辺浩司

張声和略考 傅蘭雅“時新小説”征文參賽作者考(三)姚 達兌

『清末小説から』第108号 2013.1.1

商務印書館の名称と日中合併問題2樽本照雄

《宵人一夕》の原作渡辺浩司

思綺齋的身份.....魏愛蓮著、趙穎之訳 楊味西及其《時新小説》略釈 傅蘭雅

“時新小説”征文參賽作者考(四)姚 達兌